HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	農民の生活世界からみる開発と国際市場 ： ガーナの「かごバッグ」産地を事例に
著者	牛久，晴香；USHIKU，Haruka
引用	開発論集(106)：323-329
発行日	2020-09-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第106号　323-329（2020年９月）

農民の生活世界からみる開発と国際市場
―― ガーナの「かごバッグ」産地を事例に ――

牛　久　晴　香*

「開発（development）」は元来，「何らかの対象，有機体に潜在していた能力が解放され，十分発達した形態に達するまでの過程」（エステバ 1996: 21）[1] を指します。この言葉が国際政治の場で使用されるようになった当初は，「先進国」の生活形態を最終段階とする，「発展途上国」の工業化と，GDP の成長がめざされました。その後議論は進み，開発の目的は人間として生きていくために保証されるべき基本的条件を充足し，将来の選択肢を拡大させる点にある，というおおかたの合意が形成されています。すなわち，国際開発援助は生存に必要な食料や水，保健医療・教育などの社会サービスへのアクセスが保証されていない人びとが直面する問題の解決を目的とした，国境を越えた支援といえます。アフリカの遠隔地農村などでは，財やサービスにアクセスするための現金稼得機会自体が限られていることも多いため，産業創出や雇用創出をめざした開発プロジェクトが数多く展開されてきました。

なかでも増加しているのが，手工芸品などの産品を輸出して外貨の獲得をめざす，輸出志向型農村工業に対する支援です。手工芸品は地域で育まれた技術や知識を活かすものが多いので，地域固有の文化を活かしながら人びとの生計の維持向上に貢献できる，理想的な開発対象であると期待されてきました。昨今の欧米や日本におけるフェアトレードやエシカル消費への注目を背景に，ビジネスとしての成功が見込めるのも支援がなされるゆえんでしょう。

わたしが研究を続けてきたのは，開発援助や国際市場の潮流に影響を受けながら発展を遂げてきた，ガーナのボルガ・バスケットという手工芸品です。ボルガ・バスケットはガーナの北東部のボルガタンガ地方でつくられる，ギネアキビを原料とした手編みのかごです。もとは地元で使われていた酒の濾し器でしたが，1950 年代に欧米に向けた手工芸品として改変され，現在にいたります。近年の年間輸出額は１億円前後で，同地域では農業に次ぐ第２の産業に成長しました。

ボルガタンガ地方はガーナのなかでも貧しく，出稼ぎなしに生活が成り立たない地域でした。地域内での現金稼得機会の創出が開発上の課題とされ，多くの開発プロジェクトがボルガ・バスケットを支援しました。それらのプロジェクトが目標にしたのは，国際市場の量的，

*（うしく　はるか）北海学園大学開発研究所研究員，北海学園大学経済学部講師

[1] エステバ，グスタボ．1996.「開発」ヴォルフガング・ザックス編，三浦清隆ほか訳．1996.『脱「開発」の時代：現代社会を解読するキイワード辞典』晶文社.

質的要求に応える能力の強化，すなわちバスケット生産者の「キャパシティ・ビルディング」の促進でした。具体的には，魅力的な商品の開発，品質向上のための技術指導，納期を遵守する生産管理体制の構築などがめざされました。これらは，現行の国際貿易体制からガーナの生産者が利益を享受できるようになるために不可欠な試みです。取引の維持・拡大は，村人の収入向上や選択肢の拡大にも結びつくはずです。

しかし，とくにポリティカル・エコノミーの研究者は，上記のような開発援助のとりくみに冷ややかな視線を注いできました。アフリカやアジアにおけるキャパシティ・ビルディングの取り組みは，「発展途上国」が「先進国」の価値観や基準，ルールに到達しなければならないという前提にもとづいており，現行の不均衡な政治経済的関係を固定し，再生産するものであるためです。この指摘は的を射ていて，たしかに国際開発援助やフェアトレードのとりくみが推進するのは，つまるところ「先進国」の消費者が求める基準の充足です。不均衡な力関係自体の変革を訴える先行研究の指摘はもっともであるといえます。しかし，ガーナの産地の人びとの日常的な実践をみていると，どこか現実から乖離した議論に聞こえるのも事実です。

そこで本発表では，「生活世界」という概念に着目して，ボルガ・バスケット産業の事例からわたしたちが学べることを考えてみます。「生活世界」の概念を考案したのは哲学者のエドモンド・フッサールですが，現在は民俗学や文化人類学を含む多様な学問領域で使われています。簡潔にまとめれば，生活世界とは，日々の生活を営む基盤となる，人びとが認識し定義する世界のあり方を指します。文化人類学者の松田素二は，『日常人類学宣言！―生活世界の深層へ／から』と題した著書の中で，個人と構造の関係に関する理論的研究が，リアリティから乖離していることを問題視しています。そのうえで松田は，生活者たる人間は背反的な諸要素を転換・両立させる論理を持っているとし，柔軟かつ実体的な両立の実践が展開する生活世界に，研究者が身を投じ，その豊かな可能性を論じることの重要性を示しています[2]。松田の指摘は，ボルガ・バスケット産地の人びととグローバルな経済システム・開発援助システムの関係にもあてはまるといえます。すなわち，開発援助や国際市場がもたらす変化を，ガーナの人びとがいかなるかたちで受け止め，対応してきたのかを，人びとの生活世界の論理にしたがって理解することが，国境を越えた協働の出発点として重要です。

以上をふまえ，本発表ではガーナのボルガ・バスケット産地において，開発援助や国際取引がもたらす新たな取引の基準や制度を，産地の人びとがいかなる論理のもと，いかなるかたちで受け入れてきたかを明らかにすることを目的とします。それをつうじて，開発援助やフェアトレードの議論において研究者が果たしうる役割について考えることをめざします。なお，以下の内容は 2010 年から 2014 年にかけてボルガタンガ地方の N 村でおこなった計 18ヶ月の現地調査の結果に基づいています。

まず，ボルガ・バスケット産業の特徴を説明します。以下，ボルガ・バスケットの生産者を

[2] 松田素二．2009.『日常人類学宣言！―生活世界の深層へ／から』世界思想社.

「編み手」と呼びます。ボルガ・バスケットの編み手は5,000人から1万人いると言われ，老若男女，さまざまな人がバスケットを日常的に編み，販売しています。バスケットは工場や工房で製作されるのではなく，編み手がおのおのの自宅で製作します。庭先の木の下で，家族や友人とおしゃべりを楽しみながら編んでいることが多いです。編み手は専業の職人ではなく，農業を主軸に複数の非農業活動を組み合わせて生計の安定を図る，生計多様化志向をもった農民です。そのため，各世帯にとってのバスケット製作の経済的な重要性は異なりますが，年間をつうじて必要なときにいつでも現金を得られる便利で貴重な現金稼得源となっています。なお，すべてのボルガ・バスケットは販売用につくられていて，地元では使用されていません。

編み終わったら，編み手は在村の仲買人にバスケットを販売します。その後バスケットは，国内卸売企業，外国卸売企業，消費地の小売店といった流通関係者を介して，消費者の元に届けられます。バスケット産地の生活世界という観点から重要な主体は，編み手と仲買人です。仲買人は編み手から直接バスケットを買いつけ，国内外の企業に転売する，在村の商人です。彼らは，ローカルな村社会の一員でありながら，グローバルな流通チェーンの最末端として企業の要求に応えていかなければならない立場にあります。そして，仲買人と編み手のあいだでおこなわれる取引の方法にこそ，産地の人びとが開発援助や国際市場のもたらす変化をどのようにとらえ，対応してきたのかが表れています。

仲買人と編み手は3つの方法でバスケットを売買します。第一に「現物取引」です。これは3日に1度仲買人が市場に集まり，不特定多数の編み手が持ち込むバスケットを買い付ける方法です。価格は交渉で決まり，その場で代金が支払われます。第二の方法は，デザインを指定した現物取引ですが，今回は説明を割愛します。第三は「請負契約」です。以下では現地の呼称である「コントラクト（contract)」と呼んでいきます。この方法では，仲買人が特定の編み手に対して原料や原料代を供与し，デザイン，寸法，価格，期日を指定して製作を依頼します。代金は一部前払いされ，納品数日後から数ヵ月後に残額がまとめて支払われます。

コントラクトの導入は，編み手の製作の進め方に大きな変化をもたらしました。コントラクトがはじまったのは2000年ころからで，その背景には外国企業が寸法やデザインを厳格に指定した「オーダーメイド」のバスケットの注文を増加させたことがありました。外国企業や開発援助機関は，コントラクトをボルガ・バスケットの産地が国際市場での競争力を高めていくうえで重要な取引方法であるとみなしました。なぜなら，ボルガ・バスケットのような輸出用手工芸品の文脈では，契約関係の締結によって，市場の流行に即応した製品の製作や，製品管理が容易になるからです。現物取引では難しい，集荷の予測や確実性を高めることにもつながります。そこで，企業や開発援助機関は，仲買人に生産者台帳や生産工程表の作成を促すとともに，編み手に納期を守ることの重要性を理解させようと試みました。

コントラクトでは，編み手が好きなときに市場にバスケットを持ち込む現物取引とは異なり，流通側が定めた期日に合わせて製作，販売することになります。その代わりに，仲買人は原料を供与したり，染色工程を代行したりして，編み手に現物取引にはない経済的な便宜を与

えます。これは，自律的にバスケットを編んでいた編み手の下請労働者化ととらえることもできます。それでは，生産と取引のしくみに大きな変化を求める動きに，産地の人びとはどのように対応したのでしょうか。以下では，実際にコントラクトがどのように進められているのかを，N村で活動する仲買人アブライの事例から検討します。

仲買人アブライはN村出身の仲買人で，主にアメリカのフェアトレード企業との取引を担当しています。2013年は1，2ヶ月ごとに平均3,400個，年間計1万8,000個のバスケットを輸出しました。この多数のバスケットを集めるために，アブライは主にコントラクトを活用しており，各編み手に特定のデザインの製作を割り当て，期日までに1人5個納入させています。

表：コントラクトの編み手7名の納入個数（2013年10月～2014年2月）

編み手	納入先	個数
1	アブライ	0
	他仲買人	22
2	アブライ	0
	他仲買人	22
3	アブライ	8
	他仲買人	0
4	アブライ	9
	他仲買人	75
5	アブライ	16
	他仲買人	17
6	アブライ	26
	他仲買人	8
7	アブライ	32
	他仲買人	11
対アブライ総計		91

出典：現地調査より発表者作成

しかし，現地調査の結果，コントラクトで合意された事前の約束は守られないことが多いことが分かりました。表は，アブライとコントラクトをむすんだ7名の編み手が，2013年10月から2014年2月の間に，誰に何個バスケットを納入したかを示しています。アブライはこの期間中に3回コントラクトを依頼したので，編み手は1人15個のバスケットをアブライに納入しているはずです。しかし，7名中4名は15個以下しか納入していません。そのうちの3名はアブライ以外の仲買人にはバスケットを販売しているので，選択的にアブライとのコントラクトを守らなかったことが分かります。他方で，残りの3名は15個以上を納入し，そのうち2名は約束の個数を大幅に超過しています。

ここで経済学における「契約（contract）」の本来の意味を考えてみましょう。契約とは，一定期間内における商品とその対価の交換に関する拘束力のある約束，を指します。将来の交換に関する事前の約束が交わされること，個人の合理的計算および良心と，法的・社会的な制裁を基礎として履行が促されることが，大きな特徴です。しかし，表をみるかぎり，ボルガ・バスケットにおけるコントラクトは，「契約」としては体をなしていないといわざるをえません。

経済的な便宜をあらかじめ与えているにもかかわらず，コントラクトの「不履行」が常態化している現状をアブライがどのように考えているのかを，ある日尋ねてみました。彼は「編み手を責めたところでバスケットは完成しない。約束どおり編まない人は欲しくないと拒絶したら，多くの編み手が僕の元を離れ，バスケットは集まらなくなってしまうだろう」と答えまし

た。つまり，彼は現状を問題視しているものの，制裁や排除に訴えて不履行を抑止しようとすることは編み手のコントラクトからの離脱を助長してしまい，バスケットの集荷を失敗させるだけであると考えているのです。

彼の発言を理解するには，編み手の生活におけるバスケット製作の位置づけを知る必要があります。先述のとおり，編み手は生計多様化志向をもつ農民です。彼らは自給農業や，他の経済活動，家事・育児や社会的行事との兼ね合いをとりながら，その合間に組み込むかたちでバスケットを編んでいます。自身の裁量で関与できるからこそ，従事する経済活動や社会的役割が異なる5,000人以上の人びとがボルガ・バスケット製作にたずさわってきたと言い換えることもできます。この裁量が認められず，仲買人の都合を優先しなければならないとすれば，編み手はコントラクトをむすぶことが難しくなってしまうのです。くわえて，編み手はほかの仲買人とコントラクトをむすんだり，現物取引でバスケットを販売することもできます。自分の都合に合わない条件でバスケットを製作・販売する必要がないのも，仲買人が編み手を契約で縛れない要因のひとつでしょう。

それでは，編み手による「不履行」が常態化しているにもかかわらず，アブライはどのようにして顧客企業が求めるバスケットの集荷を成功させているのでしょうか。端的にいえば，仲買人は契約を頼りにするのではなく，人海戦術と交渉によって集荷を実現しています。たとえば，アブライは1,150名の編み手とコントラクトをむすんでいます。1人5個のコントラクトの約束が守られるならば680人で足りるはずですが，その1.7倍の人数とコントラクトをむすんでいることになります。仲買人は，編み手によるバスケット製作への関与の仕方のバラツキを所与の条件としながら，人海戦術で帳尻を合わせ，集荷目標を達成しています。むろん，編み手の意志にだけ任せていたら全く集まらないかもしれないので，仲買人は個別の編み手の元を訪れ，対面的な交渉をくりかえすことで，なるべく当初の約束に近い個数を納入してもらえるように働きかけています。

重要な点は，事前の約束，すなわち契約に頼らないことです。契約の目的が確実性や予測可能性を高めることであるとすれば，ボルガ・バスケットのコントラクトはそれとは反対に，不確実性や予測不可能性を所与の条件として進められています。むしろ地元の仲買人は，それぞれの編み手が自身の裁量で製作に関われる体制を努めて維持しながら，時々によって異なる個々の編み手の「余力」をコントラクトに向けてもらおうと交渉を重ねることで，関与する編み手の数を増やし，バスケットを世界の市場に送り出すことに成功しているといえます。形式上は請負契約にみえるシステムの内実を，現地の事情に合わせて組み替えていたのです。

外国企業や開発援助関係者がくりかえし働きかけても，産地に受け入れられない変化もあります。それは，「クラフトセンター」でのバスケットの製作です。現在編み手は自宅でバスケットを製作していますが，デザインに指定があるバスケットを編む場合，寸法や色柄の間違いに気づかなかったり，家事や他の経済活動でバスケットの製作が遅れたりして，納期に間に合わないという問題が生じることがあります。生産管理と編み手の生産性向上のために，2000

年ころから開発援助機関や外国企業が取り組みはじめたのが，クラフトセンターと呼ばれるバスケット生産工場の建設でした。しかし，結論からいえばクラフトセンターは編み手の集中作業場としては機能しておらず，事実上，誘致に関わった仲買人の倉庫兼事務所となっています。

クラフトセンターでのバスケット製作はなぜ成功しないのでしょうか。この点もまた，地域の社会的文脈に関係しています。先述のとおり，編み手は農業や家事・育児，他の社会経済活動の合間を縫うようにしてバスケットを編んでいます。とくに既婚女性は，家事・育児や自給農業など自宅周辺でおこなう仕事を多く担当しています。家を長時間離れてバスケットを編むことは社会的役割の放棄とみなされ，そしりを受けることもあります。このような状況で，クラフトセンターに集まってバスケットを編むのは至難の業です。

編み手を一ヶ所に集めて製作に従事させようとする外部者の試みを拒んできたのは，仲買人でした。それは，この試みが編み手をバスケット製作から離れさせ，企業の求めるバスケットの集荷をさらに困難にすることになると感じているからです。むろん，現状に問題があるために開発援助機関や外国企業が工場生産制への移行を推奨していることも，仲買人は分かっています。そこで彼らが考え出したローカルな解決策は，編み手の自宅を訪問する「フィールドオフィサー」を設置，増員することでした。それにより，早い段階で間違いを発見して修正を図ったり，製作をうまく促したりする体制を強化しました。つまり仲買人は，編み手の生活のあり方を崩さずに企業の要求には応えていく方法を模索し，産地と国際市場とのつながりを維持，発展させようと努めているのです。

それにもかかわらず，現在もクラフトセンターは建設されつづけています。それは編み手や仲買人が建設を求めるからです。なぜ結局使わないクラフトセンターを彼らが求めつづけるのかといえば，クラフトセンターは自分たちのバスケットのすばらしさを世界の人びとが認めた証と捉えているからです。編み手は消費者が欧米や日本の人びとであることや，彼らが求めるバスケットの違いなども理解しています。しかし，自分たちのバスケットがどのように評価されているのかを知る機会はほとんどありません。消費地の人間がわざわざボルガタンガにやってきて建設するクラフトセンターは，世界の人びとに自分たちが編むバスケットが評価された証として読み換えられ，求められつづけるのです。

地域で役立てられない建物の援助は「ハコモノ援助」と呼ばれ，批判されてきました。しかし，実践的地域研究を掲げて開発実践を続けてきた，京都大学の伊谷樹一教授のグループは，プロジェクトへの住民の関与を促進するうえで，その活動を象徴する，目に見えるものや装置が必要になることが多いと指摘しています[3]。クラフトセンターにも，ボルガ・バスケット産業を盛り上げる賦活剤としての役割があるのかもしれません。

ここまでみてきたように，ボルガ・バスケットの事例では，産地の人びとは外国企業や開発

[3] 掛谷誠・伊谷樹一編．2011.『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会，pp.489-493.

援助機関が持ち込もうとする新しいシステムを，地域の社会経済のあり方や編み手の働き方の志向性に適合的なかたちに組み替えながら国際市場の求めに応え，その利益を享受しつづけることに成功しています。他方で，コントラクトを契約として徹底させず，クラフトセンターでの生産を受け入れないのは，それらが地域の実情に合っていないばかりか，バスケットを世界に送り出せない状況を生み出すことになると考えているためです。しかし，クラフトセンターの意味が地域で読み換えられている事実は，開発プロジェクトが外部者の意図とは異なるかたちで産業の盛り上がりを助ける可能性があることを示しています。

以上からわかるのは，外部者が考える「開発」に沿った評価と，現地の人びとの生活世界における評価に，「ずれ」があることです。この「ずれ」は，異なる文化的，社会的背景をもつ人びとのあいだのやりとりとなる開発援助や国際取引では必然的に生じます。研究者が開発援助やフェアトレードにおいて果たせる役割があるとすれば，この「ずれ」の解消ではないか，とわたしは考えています。プロジェクトの成果を出すことや商業的利益を上げることから自由な立場にいる研究者は，地域社会の人びとの反応やその背景にある論理を，時間をかけて総合的に明らかにすることが可能です。構造的問題の指摘や，理想・理念の追求も学術研究の重要な役割ですが，開発の対象となる社会の実態や人びとの考えから乖離してしまうと，さらなる「ずれ」を生み出すことになりかねません。常に人びとの生活の場に立ち戻り，彼らにとって変化の意味を真摯に理解しようとする地道な研究は，開発援助や倫理的消費といった国境を越えた協働の実践をより豊かなものにしていくうえでも価値をもちつづけると，わたしは信じています。